

友を亡くして

17年前、私はいつもの駅に置いた車の下に、生まれたばかりの白い綿毛の小犬がいるのを見つけました。彼女はこの5月に、私たちの親しかった人々と犬の仲間に囲まれて、その死を悼まれながら老衰のため安らかに息をひきとりました。セムあるいはセミと呼ばれるようになった彼女は、独特な性格の持ち主でした。へつらうでもなく、かといって愛情を求めるでもなく、彼女は近づかずして人間を判断し、一旦自分が仲間だと決めた人たちに對しては、セミは愛情をふりまいたものでした。セミは自分のテリトリーに踏み込んで大声で走り回る子供は嫌いでしたし、時にはそんなに子どもたちの後ろからちょこっと噛んだりもしました。彼らは大人になった今でも、セミのことを畏敬の念とともにおぼえています。セミは配達の人たちやガスの集金の人々が特に嫌いでした。私は集金の人などを、セミが吠えて脅かして追い込んだ庭の隅っから救い出さねばなりません。セミは長い散歩が好きで、田舎道を散策する時には私の乗る馬に寄り添ってついてきたものでした。少なくとも毎日10キロは歩きましたが、生前の彼女のすばらしい健康を支えていた強壮な心臓は、きっとこのことによるものと思います。セミは一日たりとも病気になることなどなかったのです。

その日、私はあるシンポジウムでスピーチするために大阪へ電車で行っていて、戻ってきた時にセミを拾ったのですが、今では詳しく覚えていませんが、その時の会合のイニシャルがSEMだったように思います。そこから帰り、私の近くに住んでいた大学教授が、私が車を置いていた駅まで送ってくれることになり、その駅でセミを見つけたというわけです。「あらあら、車の下に小犬がいる」その小犬のところにしようとする私を制するかのよう、その教授は小犬を手荒く取り上げて、「さわっちゃいけない。これは野良犬でね」と言いながら、横の方へ投げ捨てて入ります。その言葉に私は本当にムッときたので、放り出された小犬をすぐに抱き上げて私はこの子がいっしょに連れて帰るのだと言ってやりました。「でもねえ、野良犬ですよ」と、その小犬が伝染病でも持っているかと警告するかのよう、その教授は繰り返しました。

私はセミを飼う気はまったくありませんでした。すでにワクという土佐犬と警察犬になれなかったアムセルというジャーマン・シェパードを飼っていたからです。一週間と少しが過ぎましたが、セミは紀州犬が混ざってはおそらく危険だろうと誰もが言って、もらってくれる人が見つからないでいました。私がどこかにあげてしまおうとしているのをセミは気づいていたに違いありません。彼女はとてもお行儀よくしていました。ところが私が彼女を飼うことに決めた日から、目に入るものは何でも噛んでめちゃうにする大暴れを始めたのです。セミの場合、小犬時代とその少し大きくなった時代が最後までずっと続いていたように思われます。セミは他のみんなと馬の後について行くことを覚えました。ある日、セミは馬に近づき過ぎて足を踏まれ

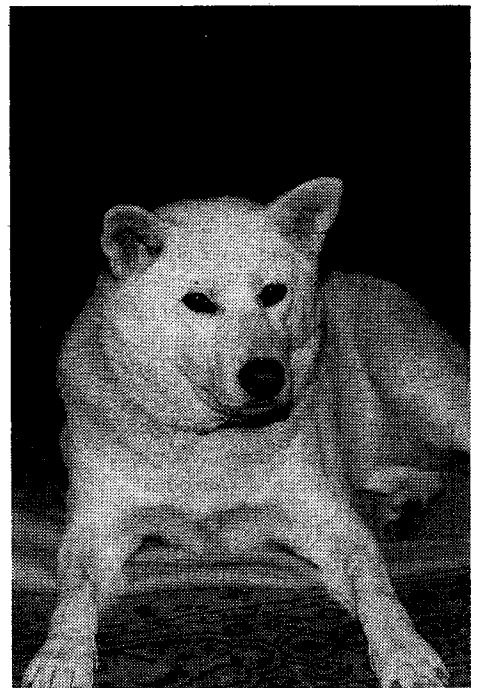
てしまったのです。鋭い叫び声をあげたものですから、私はセミが死んでしまうと思いました。しかし傷ついた足を持ち上げながらセミは立ち上がったのです。私は彼女を鞍に乗せ、落さないように慎重に家へ戻りました。セミの足はひどい傷でしたが、破損はしていませんでした。そのような痛みにもかかわらず、クンクン言ったり痛そうな声をあげたりしないのです。そこが彼女の我慢強いところだったのです。

冬はセミの独壇場になりました。彼女を覆う毛は大変分厚くなっていましたので、白熊のようになってきました。セミは何かを捕まえるのが上手でしたし、明らかに紀州犬か、秋田犬が入っていました。私の所の犬たちがみな好きな遊びは、田んぼの畦道にモグラの掘った穴に棲む野ネズミを捕まえようとして追いかけることでした。彼らは狂ったように畦の端から端へと走り回り、あちこち反狂乱の様子で掘り返すのですが、野ネズミがすでに穴の反対側へ逃げてしまっているのが落ちでした。しかしセミは違いました。彼女はひとつの穴のところに腰を据えてじっと待っているのです。他の犬たちが何がどうなっているか分かった時には、セミは捕まえた獲物を悠然と運んでいたものです。森の中ではセミは他の犬たちに獲物を追いかけて、彼らは時々獲物を殺してしまいました。横たわっている獲物を調べるために、セミが泰然自若の体でのっそりとやってくる、他の犬たちはまるで大親分がご到着になったという感じで、そそくさと後ろに控えたものです。子分たちは親分が獲物をくわえあげ帰途につくの静かに見守り、みんな親分が疲れて獲物を落すことでも望みながら、親分の影を踏まないようにして、後に続いたのです。

セミにとっての最高のグルメは産み立ての卵でした。セミが鶏小屋から卵をこっそりと頂戴していたことが分かったのは少し前のことなのです。私はそれより前は鶏が卵を産まなくなっているのだと考えていました。まったくの話、セミは卵を暖めている鶏の下から、鶏に怒りの声も立てさせず卵をまんまと頂戴していたのです。

また、セミにはテレパシーもありました。今いる犬たちはみな、家に戻って来る私の車の音を聞くといっせいに吠えだします。セミだけが私が実際に家に帰り着く一時間かそれ以上前に、落ち着きなくそわそわし始めるのでした。それはちょうど私が大阪を出る時間だったのでしょう。

夜、彼女は私の布団の横に寝て、私がいないうちはその上で寝ていましたが、亡くなる数年前からは、階段を上るのがつらそうだったので、私が一階に移って彼女といっしょに寝ることにしたのです。かつてある獣医さんが、自分の飼っていた犬が年老いていく時のことを書いていましたが、彼は犬が階段をのぼれなくなったら安楽死させようと心に決めていました。実際にそうやってしまった時、彼は一階に引っ越しました。次に、もしこの子が失禁してしまうようなことがあれば、安楽死させようと決心しました。しかしそれはできないことでした。そしてこの子が食べ物をおいしく食べられなくなり、人の手を借り



ずに食べられなくなったら、その時こそ最後だと考えていました。その犬は亡くなるまでちゃんと食べていました。セミに対する私の気持ちはこれと同じだったのです。もしセミが苦しむというようなことがあったとしたら、私はその獣医さんのような決心をしていたことでしょう。しかし彼女は老いた兵士のように安らかにこの世を去りました。

飼っていたペットが死ぬと、「あの子以外のペットは飼えっこないよ」と言う人がよくいます。私は犬に囲まれて生活していますが、彼らのうちの誰が亡くなっても、それはもう同じようにとても悲しいのです。セミが亡くなる一週間ほど前、アークからもらわれていった生後6カ月の小犬が、里親が注意を怠ったため交通事故に遭ってしまいました。アークでは関西で最高の獣医さんを探し当て、その先生が小犬の脊髄の難しい手術をして下さいました。私はその獣医さんに言ったのです。もし脊髄が切れてしまっていれば、麻酔をした上で安楽死させてあげて下さいと。しかし脊髄は切断されていませんでした。ですから今、その子と私たちがしなければならないのは、じっくり時間をかけたりハビリなのです。その子は普通の小犬がするように、跳ねたりとんだりできないかもしれませんが、片目が失明してしまっています。しかしその子は家族の一員として、アークという安心して住める家にずっと住むことになるでしょう。彼女の名はクリスタルです。彼女はセミより小さいですが紀州犬が入っています。もしセミがクリスタルに会っていたら、彼女を受け入れたかどうか分かりませんが、少なくとも自分と同じ立場だとは理解できたでしょう。

(エリザベス・オリバー)